

読売新聞 2009.

4) 常岡 寛. 北原健二先生追悼記. 眼科 2009; 51 (3): 347.

5) 常岡 寛. 会員追悼: 北原健二先生を悼む. 東京都眼科医会報 2009; 206: 2.

耳鼻咽喉科学講座

教授: 森山 寛	中耳疾患の病態とその手術的治療, 副鼻腔疾患の病態および内視鏡下鼻内手術の開発
教授: 梅澤 祐二	中耳真珠腫の病態・中耳伝音系の手術的再建
教授: 加藤 孝邦	頭頸部腫瘍・頭頸部再建外科・画像診断
准教授: 波多野 篤	頭頸部腫瘍の画像診断・手術療法
准教授: 小島 博己	中耳疾患の病態とその手術的治療, 頭頸部腫瘍の基礎的研究
准教授: 鴻 信義	鼻・副鼻腔疾患の病態と手術的治療
講師: 富谷 義徳	感染症の研究
講師: 飯田 誠	アレルギー疾患の基礎的研究, 鼻・副鼻腔疾患の病態と手術的治療
講師: 田中 康広	中耳疾患の病態と手術治療, 中耳真珠腫の基礎的研究
講師: 吉川 衛	鼻アレルギーおよび副鼻腔炎の病態における遺伝子発現制御機構の解析, 鼻・副鼻腔疾患の手術的治療
講師: 飯田 実	音声障害の診断・治療, 嚥下障害の診断・治療
講師: 松脇 由典	鼻・副鼻腔疾患の病態と手術的治療, 好酸球性炎症の基礎的研究

教育・研究概要

I. 耳科領域

中耳粘膜再生の基礎的実験と臨床応用に向けての実験をはじめとして, 真珠腫遺残上皮を標的とした遺伝子治療の研究, 安全な手術を行うことを目的としたバーチャルリアリティー技術を用いたナビゲーションシステムの開発を行っている。また当院で行った真珠腫手術はデータベースに記録され, 病態分析, 術式の検討, 疫学調査, 術後成績などの検討を行っている。難聴担当では代謝異常疾患の内耳生理について実験動物を用いた研究を行っており, 難聴患者の遺伝子解析を信州大との共同研究で行って

いる。

中耳手術は年間およそ 200 例が行われておる。人工内耳手術も年間数例行われ、良好な成績をおさめている。さらに錐体部真珠腫などの病変に対しての頭蓋底手術も脳神経外科との協力のもとに行っており、聴力および顔面神経機能を保存できる症例が増加している。くわえて本年度より聴神経腫瘍手術も開始し、経後頭蓋窩法、経中頭蓋窩法、経迷路法のアプローチを症例に応じて使い分けて行っている。

中耳炎および難聴外来では現在 8 人の参加のもと、毎週月曜日午後専門外来を設け、術後患者の診察、経過観察およびデータの管理を主に行っている。患者数も最近では毎週 60 人を越えている。滲出性中耳炎外来は毎週火曜日午後に行われ、個々の乳突蜂巣の発育程度に応じて治療法の選択を行っている。またチューブ留置期間に関しては経粘膜的なガス交換に伴う中耳腔全圧の変化を測定し、個々の症例に応じたチューブ抜去時期の決定を行っている。

神経耳科領域では、前庭誘発筋電位 (VEMP) を取り入れ、球形嚢の機能評価を前庭神経炎、メニエール病、原因不明の浮動性めまい症例等に行い、詳細な診断や治療に役立てている。また疾患別の VEMP による球形嚢異常の割合やまたメニエール病の発作期と非発作期、病期に応じての VEMP 異常の出現率なども検証している。内リンパ水腫推定検査として、遅発性内リンパ水腫疑い症例にはフロセミド負荷 VEMP 等も積極的に行っている。

内耳性めまいの中で多く見受けられる BPPV に対しては赤外線 CCD カメラによる眼振検査や ENG により、原因である患側の半規管の同定を行うとともに、半規管結石症に対しては理学療法を施行している。また中枢性疾患におけるふらつきや偏倚傾向、めまい症状のある症例に対し、神経耳科的精査を行い責任病巣について神経内科医とディスカッションし診断を行っている。現在は神経内科とともに SPECT による脳血流の解析により前庭皮質の局在や前庭系からの大脳皮質への投射の研究をすすめている。

さらに、JAXA の宇宙飛行士の選抜にあたっては、神経耳科班で第三次試験を筑波宇宙センターでおこなった。回転椅子を用いた「コロオリ刺激」による動揺病の誘発検査により、宇宙飛行士の適性試験をおこなった。

II. 鼻科領域

鼻副鼻腔炎に対する内視鏡下鼻内手術 (ESS) の

症例および術後経過に関する前向き研究を行い、難治性因子に関するデータを中心に解析している。副鼻腔腫瘍のみでなく、髄液漏、頭蓋底腫瘍や下垂体腫瘍に対する手術など、頭蓋底手術を含めた ESS の拡大適応と安全性の向上を目指し、立体内視鏡画像とステレオナビゲーションとを重畳表示させるハイテクナビゲーション手術を施行し、問題点・改良点を抽出した。現在、機械の精度や性能を改造中である。難治性である好酸球性副鼻腔炎病態に対する真菌特に *Alternaria* 由来の *Aspartate protease* の関与、また黄色ブドウ球菌スーパー抗原の関与を検討した。慢性副鼻腔炎の難治化因子の解明を目的として、鼻腔ポリープから培養した線維芽細胞を包括的に遺伝子発現解析することによって、ウイルス感染に関連する遺伝子の発現が異なることを明らかにした。現在そのメカニズムの解明を目的として遺伝子発現制御機構の検討を行っている。

III. 頭頸部腫瘍領域

現在の当院における頭頸部癌治療の主体としては、①手術②RT (放射線治療) ③CRT (放射線化学療法併用療法) である。治療の選択としては、それぞれ各癌の局在、進行度、社会的背景、年齢、Performance Status 等のこれらの要因を考慮した上、また頭頸部癌診療ガイドラインに沿った形で決定している。

手術における特徴としては、通常の進行癌に対する根治手術 (例えば下咽頭癌に対する咽頭喉頭全摘・遊離空腸再建術や喉頭癌に対する喉頭全摘術等) を施行しているが、機能温存治療として、可能な症例に対しては特に発声機能温存目的にて、積極的に喉頭温存手術 (下咽頭部分切除術・遊離皮弁再建術や喉頭部分切除術) を行い、喉頭温存率、生存率の両面において良好な成績を得ている。保存的療法や進行癌に対する後治療として、RT 治療や CDDP・5FU 併用による CRT 治療を行い良好な成績を得ている。

診断においては、NBI 内視鏡を日常診療に用いて、中下咽頭表在癌の診断・治療を行い、早期癌の診断・治療に役立てている。

研究面においては、手術の際に摘出した標本から DNA を抽出し、分子標的薬のターゲットとなる EGFR の発現性を見て、それらを今後の研究面や臨床面に応用できるような基礎となる研究を行っている。また今後は、中咽頭癌、口腔癌等の発現に関与していると言われているヒト乳頭腫ウイルス (HPV) の発現を調査する臨床研究や癌ワクチン療

法の治験等の臨床面，研究面の様々な分野での癌治療に関わる取り組みを行っていく予定である。

IV. 音声・嚥下機能に関する研究

1. 音声外科手術

声帯ポリープ・声帯結節・声帯嚢胞などに対して，フレキシブルファイバースコープ下の外来日帰り手術と全身麻酔下にマイクロフラップ法を用いたラリンゴマイクロサージャリー (LMS) をおこなっている。平成 20 年 11 月の第 60 回日本気管食道科学会において声帯嚢胞に対する外来日帰り手術治療法の報告を行った。喉頭ファイバーおよびストロボスコープ所見のみでなく，手術前後の音響分析・空気力学的検査・Voice Handicap Index (VHI) を用いた評価による比較を行うことにより，手術適応および術式決定が出来るよう検討を行う。

片側性反回神経麻痺に対しては，長年アテロコラーゲンの声帯内注入術による外来日帰り手術を行ってきた。その結果，アテロコラーゲンの声帯内注入術の適応・限界が見えてきた。アテロコラーゲンの声帯内注入術の限界と考えられる症例に対しては，喉頭枠組み手術を積極的に行っている。

2. 痙攣性発声障害の診断と治療

痙攣性発声障害に対する第 1 選択の治療であるボツリヌス治療を 2004 年 12 月から大学倫理委員会の承認のもと行っている。症例は増加傾向にあり，診断・治療に関する臨床的検討をすすめるとともに，ボツリヌス治療無効例に対する外科的治療も今後の課題である。ボツリヌス治療症例の統計を平成 21 年 5 月の第 110 回日本耳鼻咽喉科学会にて発表予定である。

3. 嚥下障害の評価と治療

嚥下障害の評価と治療には神経内科やリハ科など他科との連携，および看護師をはじめとする co medical とのチームワークが重要である。VE および VF 検査などをもとに症例の評価を行い，治療方針を検討し嚥下訓練をすすめている。

また平成 21 年 2 月 16 日には，慈恵医大附属病院のリスクマネージメント教育・研修「嚥下障害の勉強会」にて講習を行った。

V. 睡眠時無呼吸症候群に関する研究

遠隔医療は，医療資源不足が大きく関わる医療崩壊の対策の一つとして注目されている。

一方，我が国の睡眠医療は北米に比較し 10-15 年の遅れがあるとされている。その原因として，専門医師，技師の不足，十分ではない診療報酬とコスト

のアンバランス，夜間業務の人手不足，さらに睡眠障害患者は多様な訴え，合併症があり，性と対応できる様々な診療科の知識などがあげられる。

太田睡眠科学センターでは従来，耳鼻咽喉科だけではなく精神科，呼吸器内科，循環器内科，小児科，歯科など非常勤医師も含め，多様な対応が可能な体制を目指してきたが，患者の受診は増加を続け，新しい対応が求められている。そこで，今年度より日本睡眠学会で取り上げられる「Telesomnology：遠隔睡眠医学」の応用版として，IT を使った遠隔睡眠診療，遠隔睡眠検査をおこなう。臨床研究項目としては，

- 鼻呼吸と睡眠の安定性
- アレルギー性鼻炎（花粉症）の睡眠障害
- 小児の OSAS における ADHD 様症状
- 小児の OSAS における身体発育
- アデノイド顔貌における顎顔面発育と睡眠呼吸障害
- 成人 OSAS に対する新しい外科治療に加え多くの診療科の知識を統合をめざし
- 遠隔睡眠医療：Telesomnology の発展をテーマに取り上げる。

睡眠はアレルギー性鼻炎や GERD 等，耳鼻咽喉科の領域の疾患でも病態に大きな関わりをもつことが明らかになりつつある。多くの先生の睡眠医療への参加を歓迎している。

「点検・評価」

耳科領域手術に関しては中耳疾患のみでなく側頭骨錐体尖部病変，頭蓋底病変，内耳道病変に対する手術手技の工夫・開発や成績の評価を行った。また中耳真珠腫，癒着性中耳炎，滲出性中耳炎の成因ならびに治療に関して，中耳粘膜機能や耳管機能などの観点からの研究が計画どおりに行われ，中耳粘膜再生の研究，表皮細胞の三次元培養法の確立，遺残真珠腫上皮の自然消滅を目指した遺伝子治療など基礎的実験を行われ，国内外の関連学会よりシンポやパネルへの参加要請も多い。両側高度難聴者に対する人工内耳植え込み術は順調に推移し，現在まで再手術例を含めて 20 例を越える経験をした。第 24 回耳手術研修会を開催し全国から集まった 20 名の医師の研修を行った。

鼻科領域については当教室で開発した内視鏡下鼻内手術 (ESS: Endoscopic Sinus Surgery) の術式の適応拡大を行い，眼窩壁骨折，下垂体手術，鼻・副鼻腔腫瘍や頭蓋底病変なども対象疾患とした。また Navigation surgery も多数経験できた。基礎

研究では難治疾患である好酸球性副鼻腔炎の病態解明において、T-cellの関与ならびに真菌の関与などについても継続して検討した。アレルギー分野では学内や国内のアレルギー研究施設との連携でスギ花粉症の治療や好酸球の研究も行えた。またアレルギー性鼻炎患者のQOLの向上を目的とした治験計画も進めた。当教室で開発されたESSの研修のため、全国から医師32名の参加のもと手術研修会を開催した(2008年で第16回を数える)。また韓国の医師のためのESS研修会も2008年で第12回目が開催され15名の参加があった。

頭頸部腫瘍領域では血管内治療(interventional radiology: IVR)の頭頸部癌への応用を行うと同時に化学療法同時併用放射線療法を行い機能温存を図る工夫も行っている。また外来での治療が可能な内服薬(TS-1)を中心とした複合的な外来ベースの化学療法を試み、患者のQOLを上げる努力をしている。

喉頭・音声領域では日帰り手術としての喉頭疾患への手術の確立を目指している。反回神経麻痺に対するアテロコラーゲン注入術の症例数も増え成績も安定している。また痙攣性発声障害に対するボツリヌス toxin 注射も良好な症状改善が認められている。

睡眠時無呼吸においては精神神経科、呼吸器外科、歯科などと総合的な診断と治療を行うため、専門外来とPSGのための専用ベッド(2床)が稼働している。現在はとくに顎顔面形態について画像処理を行い、軟組織と骨組織の点から分析や、鼻閉が睡眠時の無呼吸に及ぼす影響の検討が行えた。また文部省科研費も基盤研究、若手研究と計10題が交付を受けた。

研究業績

I. 原著論文

- 1) Kojima H, Tanaka Y, Yaguchi Y, Miyazaki H, Murakami S, Moriyama H. Endoscope-assisted surgery via the middle cranial fossa approach for a petrous cholesteatoma. *Auris Nasus Larynx* 2008; 35(4): 469-74.
- 2) Kojima H, Yaguchi Y, Moriyama H. Middle ear hemangioma: A case report. *Auris Nasus Larynx* 2008; 35(2): 255-9.
- 3) Haruna S(Dokkyo Univ), Shimada C, Ozawa M, Fukami S, Moriyama H. A study of poor responders for long-term, low-dose macrolide administration for chronic sinusitis. *Rhinology* 2009; 47(1): 66-71.
- 4) Matsuwaki Y, Ookushi T, Asaka D, Mori E, Nakajima T, Yoshida T, Kojima J, Chiba S, Ootori N, Moriyama H. Chronic rhinosinusitis: risk factors for the recurrence of chronic rhinosinusitis based on 5-year follow-up after endoscopic sinus surgery. *Int Arch Allergy Immunol*. 2008; 146(Suppl. 1): 77-81.
- 5) Plager DA, Henke SA, Matsuwaki Y, Madaan A, Squillace DL, Dierkhising RA, Kita H. Pimecrolimus reduces eosinophil activation associated with calcium mobilization. *Int Arch Allergy Immunol* 2009; 149(2): 119-26.
- 6) Sakurai Y, Kojima H, Shiwa M, Ohashi T, Eto Y, Moriyama H. The hearing status in 12 female and 15 male Japanese Fabry patients. *Auris Nasus Larynx* 2009 Mar 2. [Epub ahead of print].
- 7) Yoshimura T, Yoshikawa M, Otori N, Haruna S, Moriyama H. Correlation between the prostaglandin D(2)/E(2) ratio in nasal polyps and the recalcitrant pathophysiology of chronic rhinosinusitis associated with bronchial asthma. *Allergol Int* 2008; 57(4): 429-36.
- 8) Mori E, Kojima H, Wada K, Moriyama H. Middle ear adenoma diagnosed by recurrent facial paralysis. *Auris Nasus Larynx* 2009; 36(1): 75-8.
- 9) Hatano A, Nakajima M, Kato T, Moriyama H. Craniofacial resection for malignant nasal and paranasal sinus tumors assisted with the endoscope. *Auris Nasus Larynx*. 2009; 36(1): 42-5.
- 10) Kawasaki N, Suzuki Y, Kato T, Tsuboi K, Matsumoto A, Kashiwagi H. Metastatic hypopharyngeal and esophageal cancer to a percutaneous endoscopic gastrostomy site. *Esophagus* 2008; 5(3): 155-6.
- 11) 小島博己, 山本和央, 力武正浩, 山口展正, 森山 寛. 最近の中耳結核症例の検討. 耳鼻咽喉科展望 2008; 51(1): 108-15.
- 12) 波多野篤, 遠藤朝則, 力武正浩, 重田泰史, 宇井直也, 加藤孝邦. 翼口蓋窩近傍腫瘍に対する手術アプローチ法の検討. 耳鼻展望 2008; 51(5): 286-93.
- 13) 波多野篤, 宇井直也, 重田泰史, 飯村慈朗, 力武正浩, 遠藤朝則, 木村晁弘. 深頸部膿瘍の臨床的検討—膿瘍の進展様式とその切開法に関して. 耳鼻展望 2009; 52(1): 23-33.
- 14) 鴻 信義. 画像ナビゲーションシステムを用いた内視鏡下鼻副鼻腔手術—先進医療としての現状と問題点. 耳鼻展望 2008; 51(5): 374-378.
- 15) 鴻 信義. 頭蓋底疾患に対する内視鏡下鼻内手術.

耳鼻展望 2009; 52(1): 43-7.

- 16) 千葉伸太郎. 通年性アレルギー性鼻炎患者における睡眠の質に関する検討. 睡眠医療 2008; 2(3): 337-42.
- 17) 田中康広, 志和成紀, 山本和央, 谷口雄一郎, 小島博己, 森山 寛. 当科における鼓室形成術 IV 型の術後聴力成績. Otol Jpn 2008; 18(5): 648-53.
- 18) 田中康広, 小島博己, 吉田隆一, 内水浩貴, 山本和央, 森山 寛. 鼓膜緊張部癒着に対する cartilage tympanoplasty の有用性. 耳鼻展望 2009; 52(1): 16-22.
- 19) 宮崎日出海, 中富浩文, 森山 寛. 聴神経腫瘍に対する Minimally Invasive Retrosigmoid Approach: Tear drop Euro coin hole technique の経験と紹介. Otol Jpn 2008; 18(5): 675-81.
- 20) 内水浩貴, 歌橋弘哉, 森山 寛. 学童期の滲出性中耳炎患者に対するアデノイド切除術の有用性. Otol Jpn 2008; 18(3): 176-81.
- 21) 飯村慈朗, 平林秀樹, 春名眞一. 当科におけるナビゲーションシステムを用いた内視鏡下鼻内副鼻腔手術. 耳鼻展望 2008; 51(5): 326-9.
- 22) 飯村慈朗, 今野 涉, 小泉さおり, 安村佐都紀, 浅井正嗣, 平林秀樹, 春名眞一. 診断に苦慮した喉頭サルコイドーシスの 1 症例. 日本耳鼻咽喉科学会会報 2008; 111(11): 701-4.
- 23) 青木謙祐, 別府 武, 川端一嘉, 山本智理子. 進行癌初回治療としての化学(放射線)療法の役割と限界手術標本病理像から見た化学(放射線)療法の効果術前化学療法と化学放射線治療(同時・異時)を施行した症例の摘出標本の検討. 耳鼻と臨 2008; 54(Suppl. 1): S40-8.
- 24) 中山次久, 小森 学, 高柳博久, 米本友明, 松脇由典. アレルギー性真菌性鼻副鼻腔炎 (AFRS) の検討. 耳鼻展望 2008; 51(2): 82-91.
- 25) 小森 学, 中山次久, 高柳博久, 米本友明. 好酸球性副鼻腔炎の治療中に発症した Churg-Strauss 症候群の 1 例. 耳鼻展望 2008; 51(2): 99-103.
- 26) 山本耕司, 富谷義徳, 添田一弘, 月館利治, 飯野 孝, 小森敦史, 澤田弘毅. めまいを主訴とした Arnold-Chiari 奇形の 1 症例. 耳鼻展望 2008; 51(2): 104-9.
- 27) 山本耕司, 加藤孝邦, 鴻 信義, 吉村 剛. 上顎に発生した歯源性粘液腫の 1 症例. 耳鼻展望 2008; 51(3): 140-4.
- 28) 高宮優子, 飯村慈朗, 今野 涉, 月館利治, 深美 悟, 平林秀樹, 春名眞一. 眼窩尖端部へ進展した副鼻腔真菌症の 1 症例. 耳鼻展望 2008; 51(5): 308-13.
- 29) 塚本裕介, 佐野知恵美, 大西雄英, 森下仁史, 有坂岳大, 佐藤一道, 外木守雄, 山根源之, 山本耕司, 小林小百合, 吉田隆一, 中島庸也. 無歯顎高齢者の閉塞型

睡眠時無呼吸症候群に対し口腔内装置を用いた治療の 1 例. 老年歯医 2008; 23(2): 187-8.

II. 総 説

- 1) 森山 寛. 看護部への導入と実践 慈恵医大病院の事例から 看護師を尊重することがフィッシュを持続させるためにいちばん重要. 看護 2008; 60(7): 29-34.
- 2) 小島博己. 中耳炎・【中耳炎・いつ手術にふみきるか 私の決断】癒着性中耳炎. ENTONI 2009; 101: 30-4.
- 3) 小島博己. 難聴を主訴とする疾患—先天性真珠腫(難聴と顔面神経麻痺). 耳鼻・頭頸外科 2008; 80(12): 865-9.
- 4) 伊藤裕之. 【“くび”の姿勢異常】嚥下障害と姿勢. 脊椎脊髄ジャーナル 2008; 21(12): 1223-7.
- 5) 石井正則. 【耳鼻咽喉科・頭頸部外科 症候群辞典】Foville syndrome, fragile X syndrome (脆弱 X syndrome), Francois-Haustrate syndrome, Fraser syndrome. 耳鼻・頭頸外科 2006; 78(5): 112-5.
- 6) 鴻 信義. 鼻副鼻腔のナビゲーション手術. 日医新報 2008; 4407: 53-6.
- 7) 千葉伸太郎. 【臨床睡眠学 睡眠障害の基礎と臨床】臨床各論 睡眠関連呼吸障害群(Sleep Related Breathing Disorders) 閉塞性睡眠時無呼吸症候群小児の閉塞性睡眠時無呼吸症候群. 日臨 2008; 66(増刊 2 臨床睡眠学): 261-70.
- 8) 田中康広, 森山 寛. 真珠腫とは(Q&A). 日医新報 2008; 4391: 94-5.
- 9) 松脇由典. 好酸球性副鼻腔炎 真菌の関与について. 日鼻科会誌 2009; 48(1): 37-9.
- 10) 内水浩貴, 森山 寛. 【短期滞在手術と耳鼻咽喉科】耳疾患と短期滞在手術 小児の滲出性中耳炎. JOHNS 2008; 24(8): 1141-4.

III. 学会発表

- 1) 森山 寛. 鼓室形成術の経験から. 福島地方部会. 福島, 4月.
- 2) Moriyama H. Athelectasis and tubal function. 8th International Chelesteatoma Conference. Antalya, June.
- 3) Moriyama H. Revision sinus surgery. 9th Kuyung Hee International Symposium. Seoul, Nov.
- 4) Yuza Y, Yamada H, Kato T, Moriyama H, Urashima M. EGFR mutations discovered in head and neck squamous cell carcinomas by full length sequencing. AACR (American Association for Cancer Research) Annual Meeting 2008. San Diego, Apr.

- 5) Ito H, Asanuma M, Kunimi Y, Yukawa K. Physical therapy for equilibrium dysfunction. 25th Barany Society Meeting. Kyoto, Apr.
- 6) Kojima H. (Workshop) Early retraction pockets; How to manage. 8th International Conference of Cholesteatoma and Mastoid Surgery. Antalya, June.
- 7) Kojima H, Yaguchi Y, Yamamoto K. (Japanese session) Middle ear regeneration using transplantation of tissue-engineered cell sheet. 8th International Conference of Cholesteatoma and Mastoid Surgery. Antalya, June.
- 8) Otori N. Mucosal preservation surgery for the frontal lesions -concept and technique of Takahashi-Moriyama method-. IV Rhinology 2008 & III World Congress for Endoscopic Surgery of the Brain, Skullbase and Spine. Sao Paulo, May.
- 9) Otori N. Endoscopic repair of the orbital floor fracture. IV Rhinology 2008 & III World Congress for Endoscopic Surgery of the Brain, Skullbase and Spine. Sao Paulo, May.
- 10) Otori N. Development of hi-tech navigation system in endoscopic sinus surgery -stereo navigation and intraoperative renewal of the CT image-. IV Rhinology 2008 & III World Congress for Endoscopic Surgery of the Brain, Skullbase and Spine. Sao Paulo, May.
- 11) Otori N. Endoscopic endonasal surgery for maxillary lesions. 2nd Asia Pacific Rhinology Innovative Leaders Forum on Advanced FESS and Endoscopic Skull Base Surgery. Singapore, Aug.
- 12) Miyazaki H, Kojima H, Shiwa M, Tanka Y, Moriyama H. A new three-dimensional navigation system for ear surgery. 8th International Conference of Cholesteatoma and Mastoid Surgery. Antalya, June.
- 13) Miyazaki H, Nakatomi H. The real time facial and cochlear nerve monitoring -Current surgical techniques to preserve the facial and cochlear nerve function-. The Superior Course of Otologic and Rhinologic Skull Base Anatomy and Surgery. Marseille, Feb.
- 14) Matsuwaki Y, Kita K. Xylanase from exogenous organisms induce degranulation of human Eosinophils possibly through a Protease Activated Receptor-2 (PAR-2). American Academy of Allergy Asthma & Immunology 2009 Annual Meeting. Washington, D.C., Mar.
- 15) Uchimizu H, Matsuwaki Y, Kato M, Moriyama H. Evaluation of cytokine profiles in the secretion from eosinophilic otitis media. American Academy of Allergy Asthma & Immunology 2009 Annual Meeting. Washington, D.C., Mar.
- 16) Asaka D, Nakajima T, Ohno T, Matsuwaki Y, Moriyama H, Saito H. Reciprocal regulation of chitinase 3-like1 production from human macrophages by Th1 and Th2 cytokines. American Academy of Allergy Asthma & Immunology 2009 Annual Meeting. Washington, D.C., Feb. [J Allergy Clin Immunol 2009; 123(2 Supplement): S255]
- 17) Okushi T, Chiba S¹⁾, Matsuwaki Y, Mori E¹⁾, Oota F¹⁾(¹⁾Ohta General Hospital), Otori N, Moriyama H. Relationship between residual ethmoid cells and recurrence of chronic rhinosinusitis (CRS) after endoscopic sinus surgery (ESS). ERS-ISIAN CONGRESS 2008. Athens, June.
- 18) 遠藤 誠(国保旭中央病院), 千葉伸太郎, 森脇宏人, 内田 亮, 澤田弘毅, 森 恵莉, 太田史一, 太田正治(太田総合病院). Maxillofacial growth in children with sleep-disordered breathing (SDB) before and after adenotonsillectomy. 第9回世界睡眠時無呼吸学会. Seoul, Mar.
- 19) Suzuki R, Watanabe M, Kojima H, Moriyama H, Manome Y. Utilization of caspase-14 promoter for selective transgene expression in squamous layers of cholesteatoma in the middle ear. 第14回日本遺伝子治療学会総会. 札幌, 6月.
- 20) Yamamoto K, Yaguchi Y, Wada K, Uchimizu H, Tanaka Y, Kojima H, Moriyama H. Middle ear mucosa regeneration by grafting of three-dimensional middle ear mucosal organ. 8th International Conference on Cholesteatoma & Ear Surgery. Antalya, June.

IV. 著 書

- 1) 中島庸也. 5. 鼻・副鼻腔疾患 129. 術後性上顎嚢胞. 森山 寛, 小林俊光, 川内秀之, 岸本誠司編. 今日の耳鼻咽喉科頭頸部外科治療指針. 第3版. 東京: 医学書院, 2008. p.262-4.
- 2) 柳 清. I. 耳鼻咽喉科疾患患者とのインフォームドコンセントー患者・その家族指導の仕方ー 鼻科手術. 肥塚泉編. すぐに役立つ外来耳鼻咽喉科疾患診療のコツ. 東京: 全日本病院出版会, 2008. p.327-32.
- 3) 小島博己. 2. 救急・プライマリケア 36. 中耳外傷. 森山 寛, 小林俊光, 川内秀之, 岸本誠司編. 今日の耳鼻咽喉科頭頸部外科治療指針. 第3版. 東京: 医学書院, 2008. p.85.

- 4) 鴻 信義. 5. 鼻・副鼻腔疾患 144. 眼窩底骨折. 森山 寛, 小林俊光, 川内秀之, 岸本誠司編. 今日の耳鼻咽喉科頭頸部外科治療指針. 第3版. 東京: 医学書院, 2008. p.294-5.
- 5) 千葉伸太郎. 第1部. 総論 B. 睡眠障害の診断分類 4. 睡眠関連呼吸障害. 山寺亘. 睡眠医療ハンドブック: ライフステージ別症例から学ぶ: 初学者のための. 東京: 診断と治療社, 2009. p.24-33.

V. その他

- 1) 石井正則, 石井彩子, 須田稔士, 歌橋弘哉, 福田佳三. 航空機搭乗員におけるアレルギー性鼻炎についての調査・研究. 航空医学問題に関する研究報告書 2008; 67-75.
- 2) 石井正則. 乗り物酔い克服訓練あれこれ. 日経 PLUS1 2008.
- 3) 石井正則. メニエール病. 齋藤 康監修. わかりやすい疾患と処方薬の解説 2009. 大改訂版. 東京: アークメディア, 2009. p.384-9.
- 4) 齊藤孝夫. アレルギー性鼻炎とのつきあい方. 同愛記念病院第5回市民講座. 東京, 1月.
- 5) 宮崎日出海, 中富浩文. 聴神経腫瘍手術をアシストする新たな聴覚モニタリング法の開発—鍵穴手術での聴力温存率の飛躍的な向上を目指して—. 沖中記念成人病研究所研究助成報告会. 東京, 3月.

麻 醉 科 学 講 座

教 授: 上園 晶一	小児麻酔, 心臓血管外科麻酔, 肺高血圧の診断と治療
教 授: 根津 武彦	集中治療
教 授: 近江 禎子	局所麻酔
准教授: 瀧浪 将典	安全管理, 術中モニター
准教授: 近藤 一郎	脊髄における疼痛機序
准教授: 三尾 寧	麻酔薬の臓器保護作用
講 師: 北原 雅樹	疼痛管理
講 師: 谷口 由枝	周術期における体温管理, アウトカムスタディ
講 師: 藤原千江子	呼吸, モニター
講 師: 内野 滋彦	集中治療, 急性腎傷害, 血液浄化
講 師: 庄司 和広	術後疼痛管理

教育・研究概要

I. 臨床麻酔領域の研究

1. 小児患者における挿管困難予測因子の研究
小顎症の代表的疾患である Hemifacial Microsomia (HFM) は挿管困難症を伴うことが多い。挿管困難因子を予測しうる因子について現在解析中である。
2. 新たな輸液指標に関する研究
パルスオキシメータのプレチスモグラフ波形振幅の呼吸性変動を測定する脈波変動指標 (PVI: Radial 7™. Masimo) は, 輸液管理の非侵襲的な指標として有用である可能性があることが近年示唆されている。PVI と, 輸液管理の指標として有用であるとされている一回拍出量変動 (SVV: FloTrac CO monitor™. Edwards) および従来一般的に輸液管理の指標とされてきた中心静脈圧 (CVP) を測定, 比較して, より低侵襲に安全な術中輸液管理が行えるかを検討し, PVI がよい指標になることを観察した。
3. 硬膜外麻酔法におけるテストドースの有用性の検討
硬膜外麻酔におけるテストドースとして2%リドカイン3mlの有用性を研究した。側臥位にて18ゲージ多孔式硬膜外カテーテル挿入後, 2%リドカイン3mlを注入し, 5分後に cold sensation, Bromage scale を確認した。これらの判定に難渋することはなかったが, cold sensation の消失範囲は2~6椎間分とばらつきがあった。全症例を通じて著明な血圧低下, 心拍数上昇, 意識低下, 呼吸抑制な